

札幌市民のくらしとテレビに関する調査2004 調査結果

本冊子では、回答者の皆さまにご協力いただいた本調査の主な結果をご報告いたします。

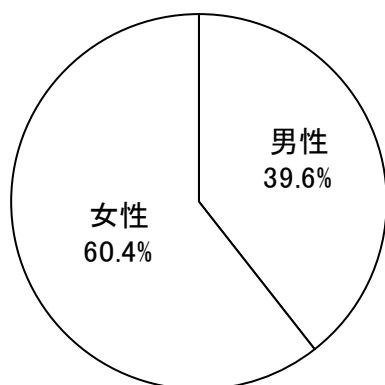
1. 回答者の皆さんのあらし

(1) 年齢、性別、居住区

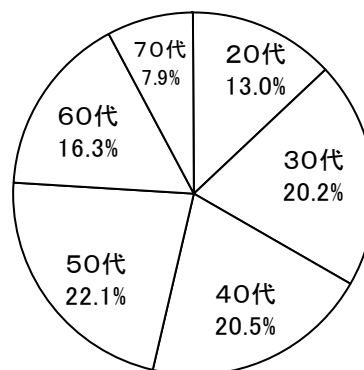
回答者の皆さんの性別、年齢（年代別）、札幌市内の居住区の内訳は次に示したグラフのとおりです（【図表1-1】【図表1-2】）。全体的には、女性の方の回答が5%程度多めに回収されました。男女含む年代別では、20代が3.5%多く、60代と70代がそれぞれ2%程度少なく回収されましたが、ほかの年代についてはほとんど差はありませんでした。

さらに、居住区別の回収比率には、ほとんど偏りはみられませんでした。

【図表1-1】回答者の性別



【図表1-2】回答者の年代



(2) 居住地別の居住年数

次に、回答者の皆さんの居住歴についてです。皆さんが札幌に居住された年数は平均で28.7年、北海道内（札幌も含む）に居住された年数は同じく平均で43.8年でした。

加えて、現在、札幌市民である回答者の皆さんが、札幌以外の北海道内に居住された年数は平均で15.3年、北海道外に居住された年数は同じく平均で4.4年でした。

この結果をみると、道外居住年の平均が4.4年とかなり短いことがわかります。そこで、【図表1-3】に示したのは、逆に道外居住歴のない回答者がどのくらいいるかを表したグラフです。実に全回答者の7割近くが道外居住歴なしに該当します。そのほかに、仕事などで一時的に1～5年程度道外居住をしたと思われる回答者が約13%いました。また、4年制大学卒業までにあたる22年以上を道外ですごした回答者が約9%、それに10年をこえる長期道外居住者を加えれば、いわゆる道外出身者とみなせる回答者が、およそ10～15%程度いるとみることができます。

もっとも、居住年数自体の意味は、回答者おひとりおひとりによってそれぞれ異なると思います。そこで、回答者ご本人の年齢と比較して、生涯年数の50%をこえる期間をどこですごしているかに応じてグループに分け、集計した結果が【図表1-4】です。人生の半分以上を札幌ですごした「札幌っ子」が6割以上の割合を占めていました。さらに、札幌以外の道外でこれに相当する期間をすごした「道産子」が25%、逆に道外で大半の期間をすごした「道外人」が7%程度という結果でした。

以上の結果から、本調査の回答者の傾向をみるかぎりでは、札幌市民の多くは、人生の大半の期間を札幌ですごし、道外居住経験の少ない方が多いことがわかります。

(3) 職業・所属団体・学歴

回答者の皆さんの職業については、正社員・職員（フルタイムの雇用者、自治体の正職員も含む）（30.8%）がもっとも多く、ついで多かったのが主婦（26.0%）でした。

学歴では、高校卒（旧制中学を含む）（43.9%）がもっとも多く、ついで専門学校・短大卒（旧制高校卒を含む）（28.7%）、四年制大学・大学院卒（21.0%）という順でした（【図表1-5】）。

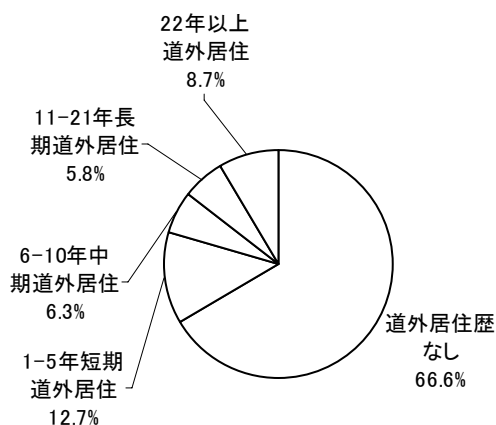
所属して活動している組織・団体・サークルについて聞いたところ、参加団体なし（45.7%）がもっとも多いという結果でした。参加しているものでもっとも多かったのは、趣味で参加しているサークル（14.8%）で、ついでスポーツの団体やサークル（9.6%）でした。

(4) 自由に使える金額、メディア関連支出

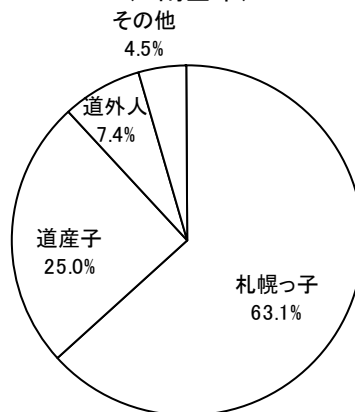
回答者の皆さんが一ヶ月あたりで自由に使える金額を、可処分所得としておたずねしました。その結果、2万円台（17.8%）がもっとも多い回答でした。全体で平均すると約4万円となりました。

回答者の皆さんが、各種のメディアについてどれだけ支出しているかについて示したのが、【図表1-6】です。もっとも多くの支出があてられているのが携帯電話でした。書籍・雑誌については、3千円未満

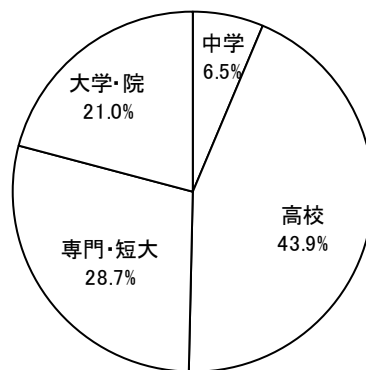
【図表1-3】回答者の主な居住地



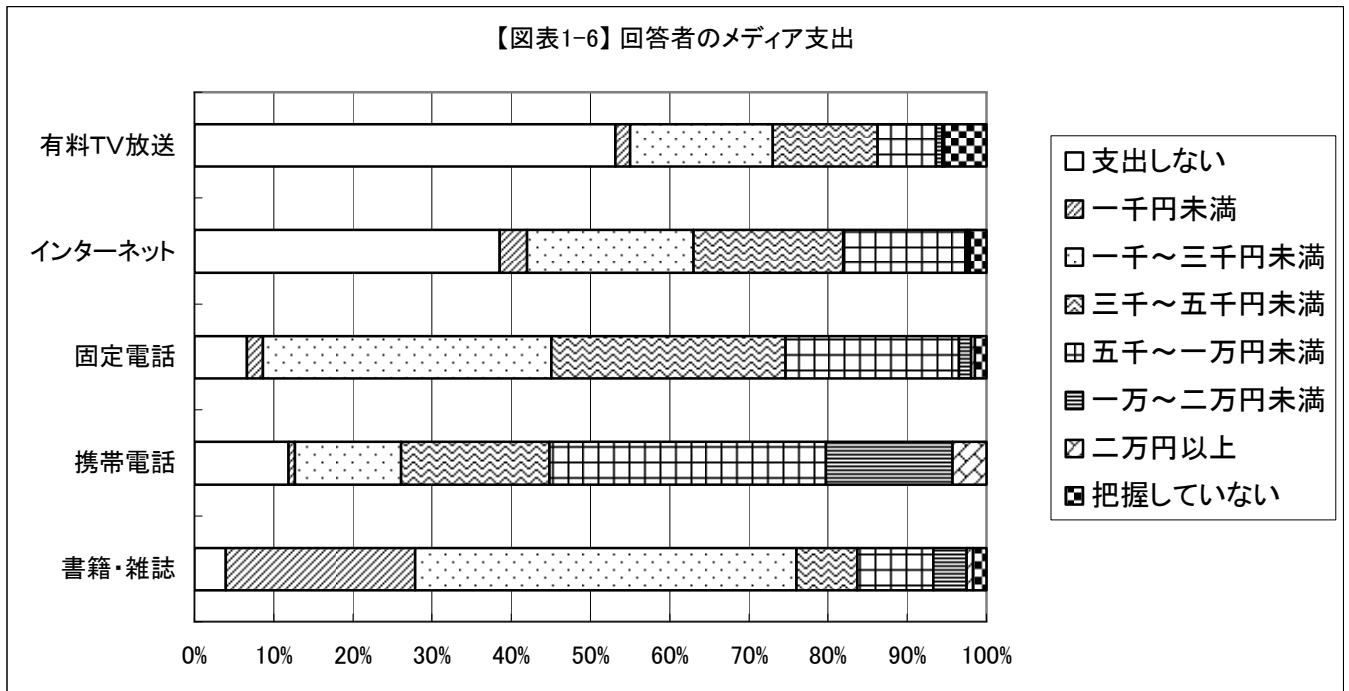
【図表1-4】回答者の主な居住地（5割基準）



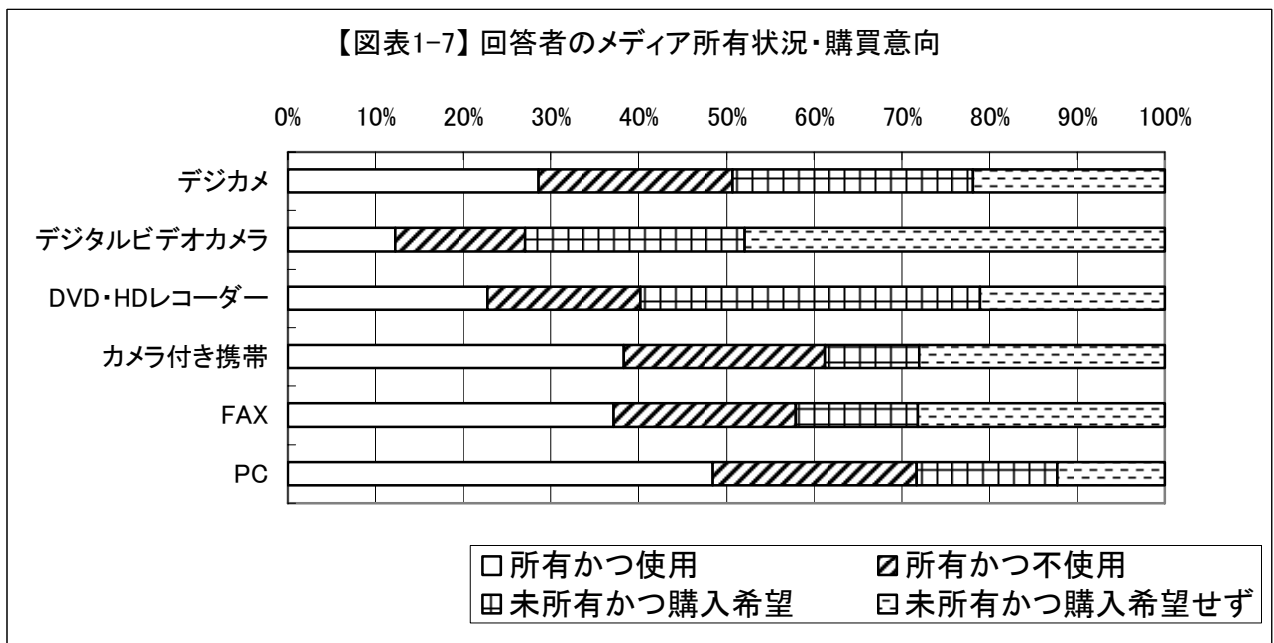
【図表1-5】回答者の学歴



までの少額の占める割合が多いものの、額の大小にかかわらず支出している人の割合はもっとも多いという結果でした。書籍について支出している人の割合が多かったのは、固定電話でした。逆に、支出が少なかったのは衛星放送・BS放送・ケーブルテレビなどの有料テレビ放送への支出で、「支出しない」という回答が5割程度を占めていました。



テレビ以外のメディアの所有状況および購買意向については、パーソナル・コンピューターの所有が70%に達しており、商品としてかなり成熟してきているのがわかります（【図表1-7】）。また、近年普及が進んだデジタルカメラやカメラ付き携帯も所有率が50～60%に達しています。デジタルカメラについては、現在未所有でかつ購入希望をもっている回答者がかなりいることから、もうしばらく普及が進みそうです。現在普及度が低いけれども、今後大きく伸びそうなのが、DVD・HDレコーダーでした。これは、所有率が現在40%ほどでしたが、それを上回る購入希望者がいるため、今後の普及に向けた潜在力を秘めています。また、それによるテレビ視聴への影響も興味深いものがあります。



2. 回答者の皆さんのテレビ視聴

(1) 視聴時間、BS放送の視聴、所有テレビの状況

次に、本調査の主題であります回答者の皆さんのテレビ視聴についてまとめます。

まず、普段テレビを視聴されるかどうかという点について、96.4%の回答者がテレビを視聴しており、ほとんど、あるいは、まったくみないという回答者は3.6%でした。

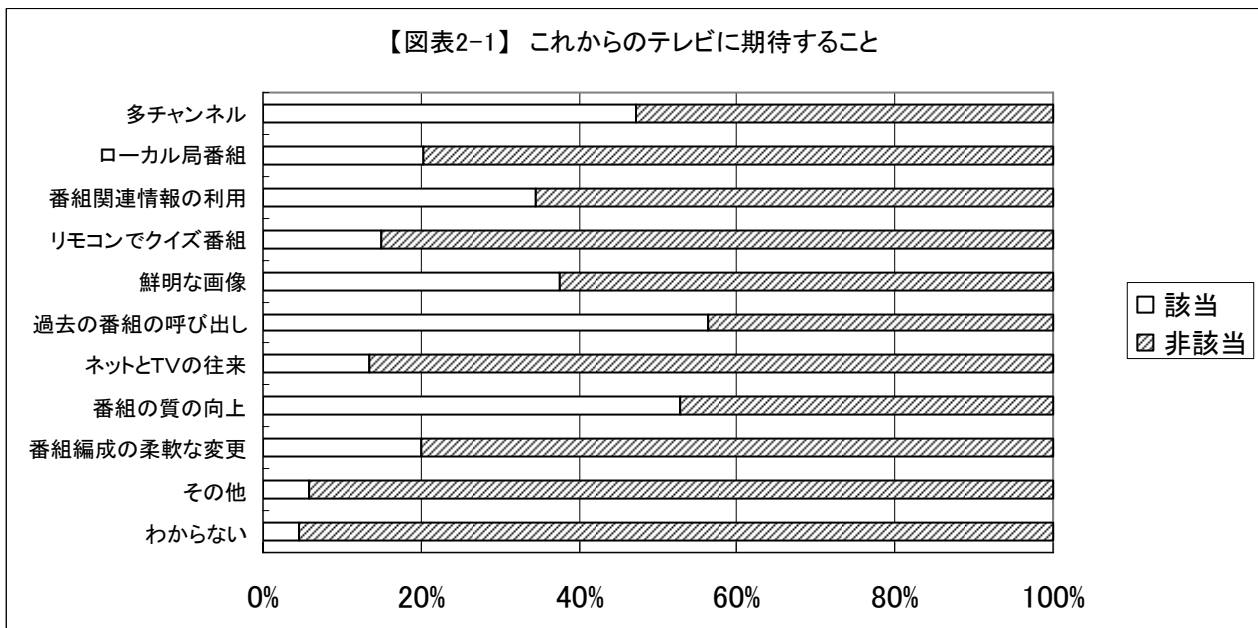
視聴時間は、平均で4.1時間でした。前年と比較した視聴時間の増減については、変化なしと答えた回答がもっとも多くありました(67.9%)。変化の増減の幅については、個人差が大きく、どのような要因によるものかは一概にはいえません。平均で見ると、増加した回答者の平均が98分、減少した回答者の平均が74分でした。

回答者の皆さんのご家庭で「NHKのBS放送が視聴できる」と答えたのが、48.1%とほぼ半数に達しており、かなり普及していることがうかがえます。視聴できると答えた回答者の視聴歴は、平均で3.1年という結果でした。

自宅で所有しているテレビのうち、主な1台について回答していただいた結果、画面のサイズは平均で27インチ、回答した時点で地上波デジタル放送に対応しているテレビを所有している回答者は、明確に「対応している」と答えた回答者とややあいまいに「対応していると思う」と答えた回答者をあわせると15.7%でした。2006年の地上デジタル放送の開始までに、ここからどれだけ普及が進むかが注目されます。また、回答者の皆さんがご家庭で所有しているテレビの総数は、平均で2.3台でした。

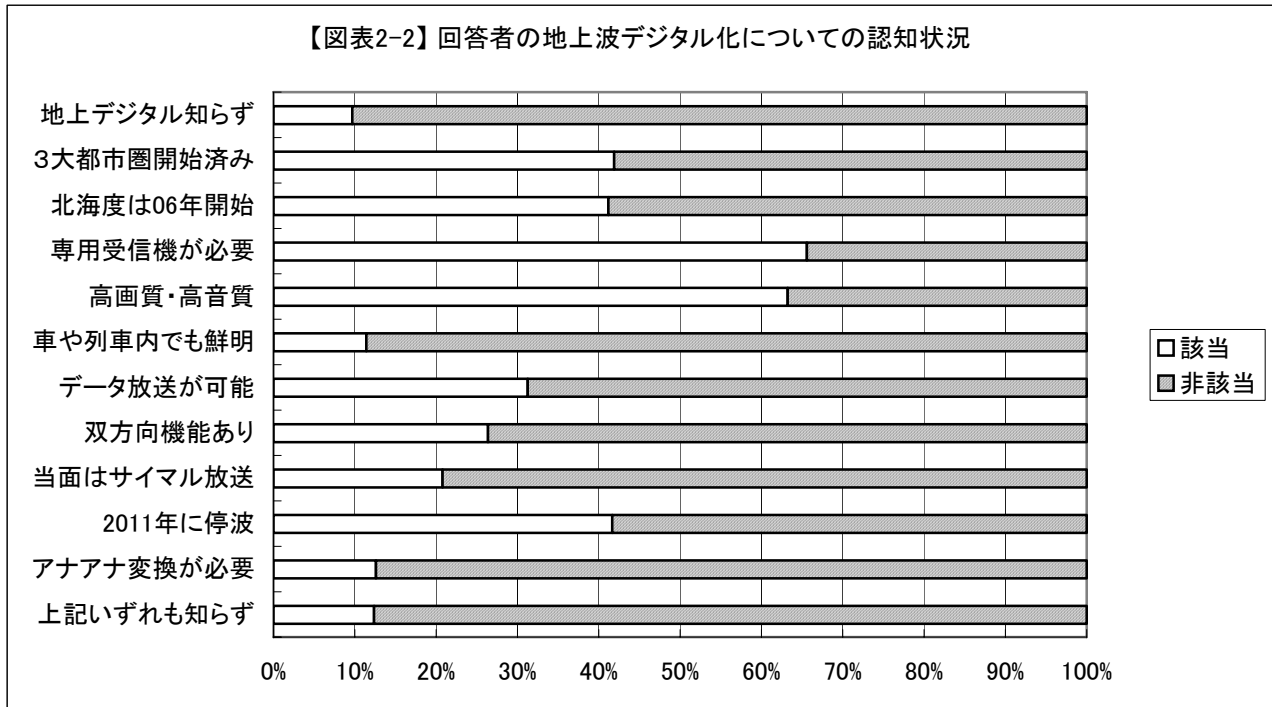
(2) テレビについての意識

次に、これからのテレビに期待することがらを回答者の皆さんに選択肢で選んでいただいた結果を示したのが、【図表2-1】です。もっとも回答が多かったのが、過去の番組を必要に応じて呼び出して視聴できること、という選択肢でした。ビデオデッキから最近のDVDレコーダー、HD(ハードディスク



ク) レコーダーの普及によって、みたい番組を見逃すことはだいぶ少なくなったように思いますが、それでもこうしたデータベース型視聴への期待が大きいことがわかります。昔視聴して思い出に残っている番組や放送当時は関心がなく、後になってからみたくなった番組などをみてみたいという要望があるように思えます。

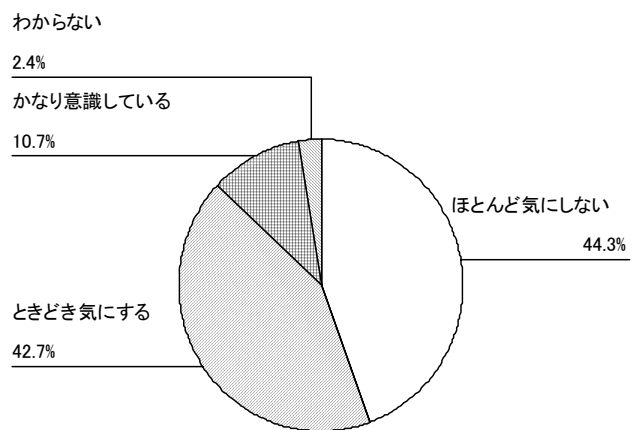
また、多くのチャンネルを選べることや番組の質の向上についても高い期待がみられました。データベース型視聴への期待と多チャンネルへの期待が高いことから考えると、視聴時点だけでなく、過去にさかのぼる幅広い選択肢から番組を選択して視聴したいという意向がうかがえます。



2006年に札幌ではじまる地上波のデジタル放送について、回答者の皆さんがどの程度の知識を取得しているかについてもおたずねしました（【図表 2-2】）。そもそも地上波デジタル化についてご存じでない回答者は10%程度で、多くの回答者は地上波デジタル化について何らかの知識をおもちであることがわかります。特に認知度が高かったのは、デジタル化された放送を視聴するために専用の受信機が必要であること、高画質・高音質になるという項目で、これらについては60%以上の回答者がご存じでした。東阪名の3大都市圏ではすでに地上波デジタル化がおこなわれていることや北海道での開始が2006年であること、また2011年には現在のアナログ波が停止することについても、40%ほどの回答者が知っていました。逆に、従来のアナログ波と異なり、車や列車内などの移動体内部でも鮮明に視聴できることやいわゆるアナアナ変換が必要であることについては、まだまだ認知度が低く10%程度でした。

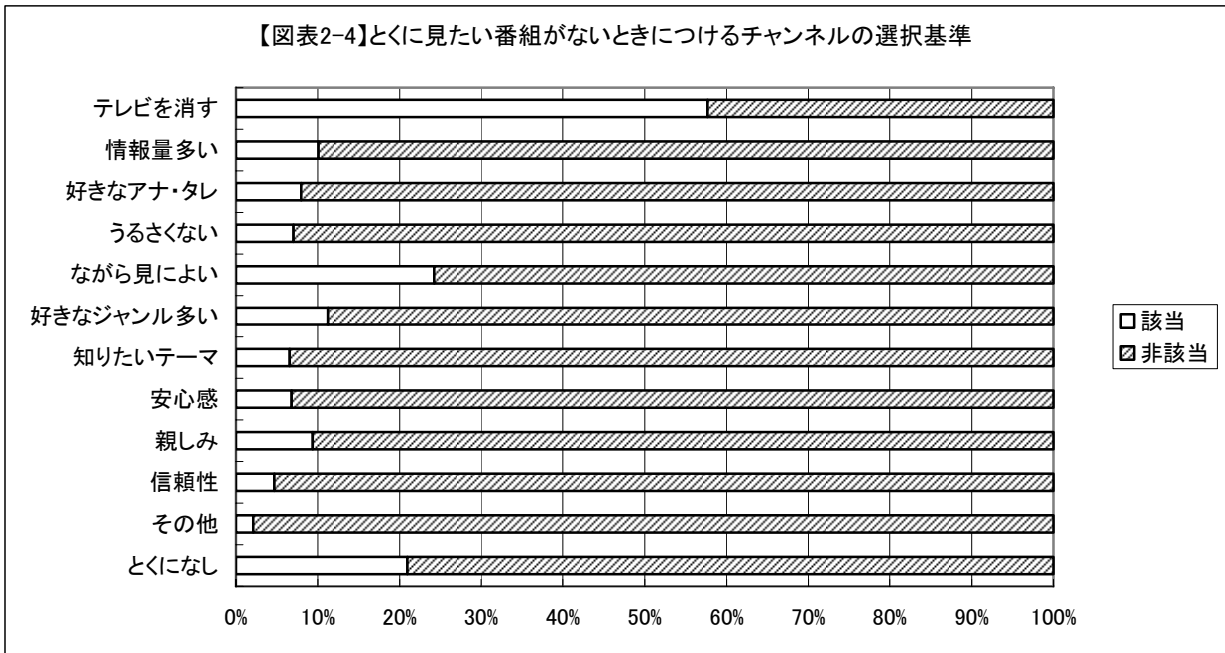
放送している番組が東京のキー局制作の番組であるのか、それともローカル局制作の番組であるのかについて回答者の皆さんが

【図表 2-3】 ローカル局制作か、キー局制作かを意識するか

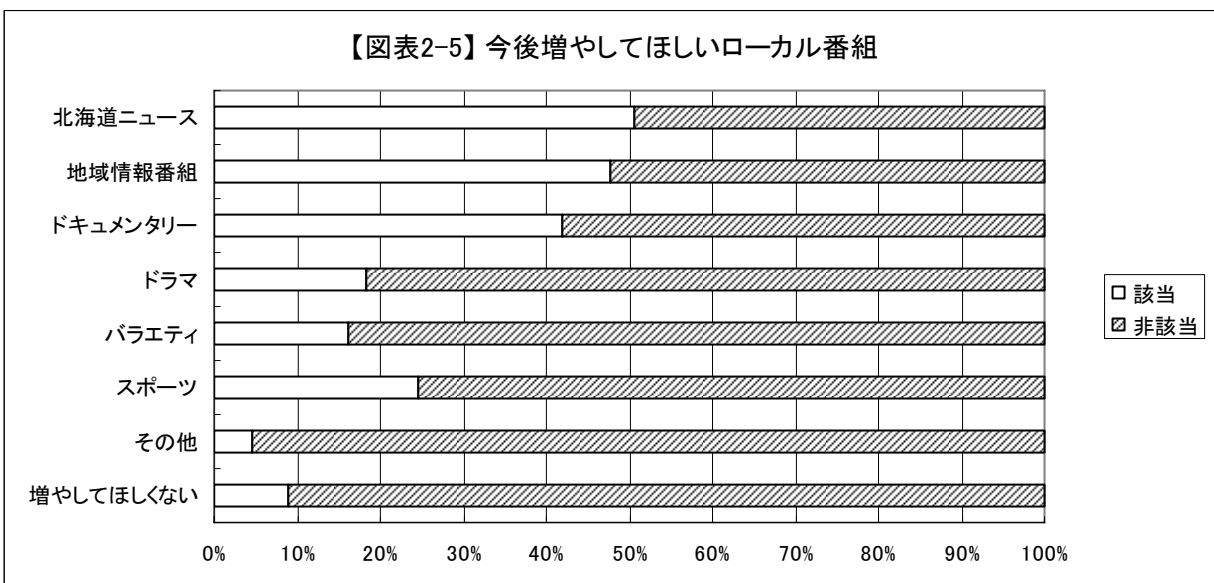


どの程度意識されているのかをおたずねしたところ、「ほとんど気にしない」という回答者と「ときどき気にする」という回答者がともに40%強と、同じくらいの割合でいらっしゃいました(【図表2-3】)。

日常的なテレビ視聴において、とくにみたい番組がない場合につけるチャンネルをどのようにして選ぶかについて聞いたところ、「みたい番組がないときはテレビを消す」という回答がもっとも多いという結果でした(【図表2-4】)。ついで、「『ながら見』をするのに良いから」によいからという理由があがっています。この結果をみるかぎり、視聴しようとした特定の番組が終わるとテレビを消して視聴をやめたり、テレビはつけたままで他のことをしはじめる方が多いようです。



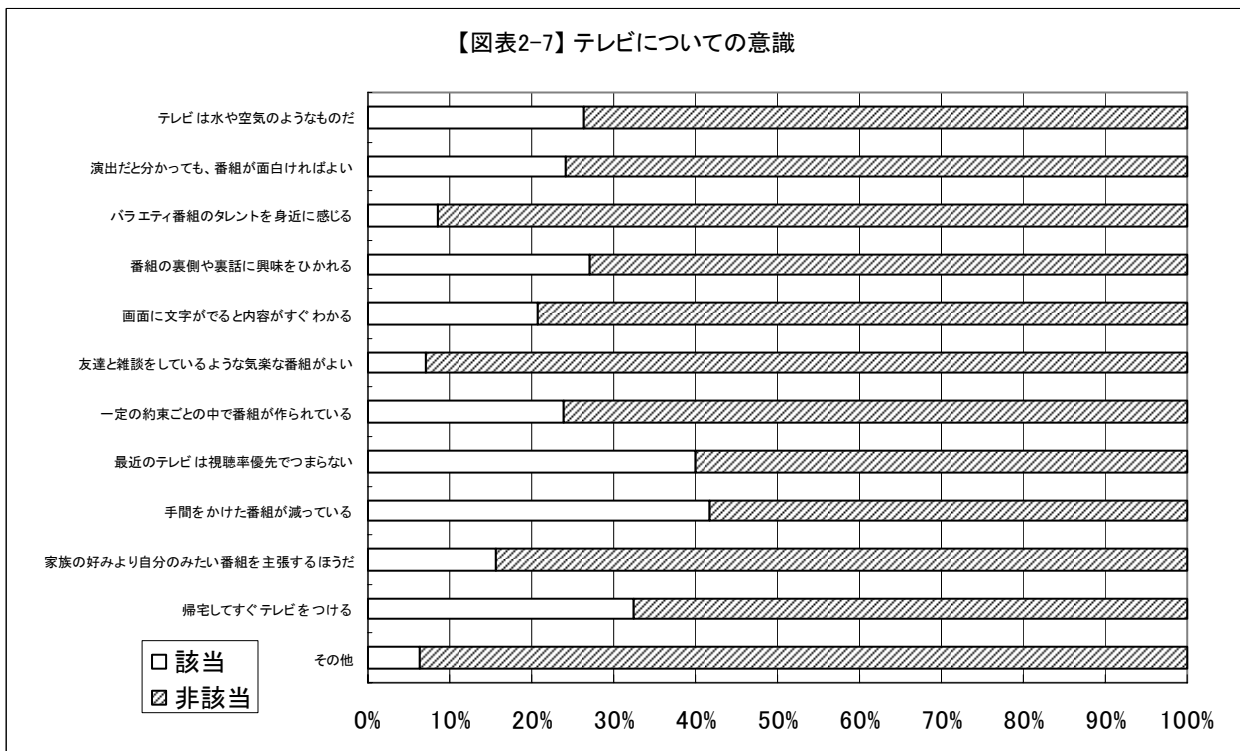
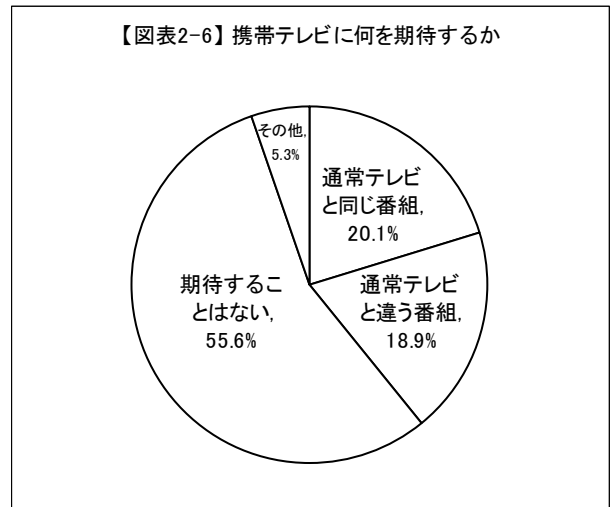
ローカル番組に関する回答者の皆さんの意識を調べるために、今後どのようなローカル番組を増やしてほしいかをおたずねしました(【図表2-5】)。その結果、「北海道のニュース」、「地域についての情報番組」、「北海道を扱ったドキュメンタリー」という回答が多くあがりました。北海道発のバラエティ番組「水曜どうでしょう」が人気を集めたため、もう少しバラエティに回答が集まるかとも思われたのですが、実際には15%程度でした。第2の「どうでしょう」が生まれるのは難しいと考えられているのでしょうか、それとも北海道発バラエティへの期待の広がり、まだまだ限定的なののでしょうか。



逆にローカル番組を増やしてほしいという回答は少なく、回答者の皆さんの北海道ローカル番組への期待は、ニュース・情報番組を中心として、まだまだあるという結果でした。

今後のテレビ放送の展開として、携帯電話によるテレビ視聴について、回答者の皆さんが期待することがらをおたずねしました（【図表 2-6】）。その結果、「特に期待することはない」という回答がもっとも多くあがりました。このあたりは、携帯テレビのイメージがまだつかみきれないか、出先での携帯によるテレビ視聴について日常的な場面でのニーズが思い浮かばないせいではないでしょうか。

回答者の皆さんのテレビについての意識をまとめたのが【図表 2-7】です。比較的回答が多かったのは、「最近のテレビ番組は、視聴率だけを優先してつまらない」、「手間をかけた番組が減っていると思う」といった現在のテレビへのやや批判的な意識でした。その一方で5人に一人程度の回答者の方が、「演出だと分かっても、番組が面白ければよい」、「番組制作の裏側や裏話に興味をひかれる」、「一定の約束事の中で、テレビは作られている」といった回答をしており、作り手サイドへの関心をおもちであるとともに、娯楽として提供されている番組への割り切った態度が読みとれました。また、「帰宅したらすぐにテレビをつける」とか、「テレビは水や空気のようなものだ」といった回答もやはり5人に一人ほどの割合で見られ、こうした回答者にとっては、テレビが生活の「環境」として位置づけられていることがわかります。



そこで、これらの回答結果から回答者の皆さんの視聴態度をタイプ分けするために、【図表 2-8】に示した類型化をおこないました。この類型化は、【図表 2-4】に示した結果で、とくにみたい番組がない場合に「テレビを消す」という選択肢について該当か/非該当かということと、【図表 2-7】におけ

る「帰宅してすぐテレビをつける」という選択肢について該当か／非該当かに応じて4つのタイプに振り分けたものです。【図表 2-8】には、各タイプにあてはまる回答者数とパーセンテージを示しました。

「とりあえず派」は、自宅に帰ったらまずテレビをつけ、その後、見たい番組がないとテレビを消してしまうという視聴態度を示しています。「つけ放し派」は、帰宅後すぐにテレビをつけ、見たい番組がなくともそのままテレビをつけ放しにしているタイプの方です。「マイ・プログラム派」は、帰宅してすぐテレビをつけることはせず、見たい番組を視聴したらテレビを消すという視聴行動をとっています（*このタイプの名称は、NHK放送文化研究所の研究結果で使用されていたものを借用しました）。

「つけたらとまらない派」は、帰宅してすぐにテレビはつけないものの、いったんテレビをつけたらあとはそのままつけ放しにしているタイプです。もっとも多かったのが「マイ・プログラム派」で、次に多かったのが「つけ放し派」でした。テレビの視聴に対してもっとも選択的な「マイ・プログラム派」と逆にもっとも非選択的な「つけ放し派」の2極に大きく分かれています。

【図表 2-8】		帰宅したらすぐにテレビをつける	
		該当	非該当
見たい番組がないときはテレビを消す	該当	とりあえず派 (55, 12.8%)	マイ・プログラム派 (181, 42.1%)
	非該当	つけ放し派 (112, 26.0%)	つけたらとまらない派 (63, 14.7%)

(3) 習慣的視聴と偶発的視聴

視聴者がみる番組には、大きくわけて、日常的に繰り返し視聴している特定の番組（よくみる番組）と、たまたまなんらかの理由で番組のことを知り、偶発的にみる不特定の番組（たまたまみた番組）とがあります。ここでは、本調査の回答者である札幌市民の皆さんが、どのような番組を「よくみる番組」、「たまたまみた番組」としてあげているかまとめ、その傾向について分析します。

① 「よくみる番組」の選択傾向

回答者の皆さんがあげた「よくみる番組」で5件以上の回答があったものを示したのが【図表 2-9】です（有効回答の総数は347件）。この結果から、情報番組とニュース番組が多くあげられていることがわかります。情報番組・ニュース番組とも、それぞれ複数の番組があげられていることから、同一時間帯・同一ジャンルの番組からどの番組を選ぶかは、視聴者の好みや好みを反映しつつ形成された習慣によるものであると思われます。

例えば、もっとも件数が多かった「めざましテレビ」を例にあげますと、この番組をあげている回答者の方は、次のような理由を記しています。

「共働きのため、朝おきてから時計がわりにTVをつけています。みても、今何分頃とわかりやすく、さらに、「今日のうらない」や「今日のわんこ」など興味のあるコーナーが多いため。」（26歳、女性）

「朝の準備時の時間の目安となるから。」（28歳、女性）

「朝はOL時代から『めざましテレビ』を見ていたので、結婚して子供が出来ても見ている。今は子供が「わんこ」のコーナーを楽しみにしている。」（36歳、女性）

「朝のニュース番組（情報系）の中で一番楽しくて見やすい、TV 表示の時間が大きくて子供にもわかりやすいので。」（37歳、女性）

「朝の情報番組としては、自分に合っている。毎日見るので、時間の流れがわかる。さわやかなので良い。」（40歳、女性）

「何年も見ている。出勤前の時間の目安となっている事と、情報源として。」（47歳、女性）

「朝、時間を知るため、いつも娘たちが好んでこの番組をつけっ放しにしているため、ほとんど習慣となっている。」（49歳、女性）

同じ放送局で、土曜日には「めざましどようび」という番組も放送しており、この番組についても「月曜から金曜も『めざまし』を見ているから」（33歳、男性）、「月曜から金曜まで『めざましテレビ』を見ているので、何気なく」（43歳、女性）といった理由で、そのまま同じ時間帯を同一の放送局の視聴にあてる例がみられます。

この番組の例からもわかりますように、回答者の皆さんは、「自分にあっている」「わかりやすい」「楽しい」など、自分の好みにあわせて番組を選びつつ、それを何年もかけて習慣化させていることがわかります。とりわけ、出勤前や登校前の時間帯は、分刻みのスケジュールであることもあって、その目安となる番組編成は回答者の皆さんに重宝されているようです。

同じ朝の情報番組で、件数の多かった「ズームイン SUPER」については、「めざましテレビ」であげられていたことにくわえて、「ほとんどの番組は～をしながらが多いので目・耳共に入りやすい（特にズームイン SUPER は）。」（59歳、女性）のように「ながら視聴」しやすいといった意見や、「通勤前に時計がわりに見ていることと、この番組のアナウンサーやキャスターに好感を持っているのでつい見てしまう。」（48歳、女性）のように出演者への好感、「朝起きてすぐ情報を得られるから。全国版だけでなく北海道もくわしく放送するから。」（37歳、女性）のように北海道の情報が提供されていることを魅力にあげている回答もみられました。

夜の時間帯で各局が放送しているニュース番組の例として、「報道ステーション」をとりあげてみます。

「毎日の出来事を知るため。古舘氏の話の切り口も好きなため。」（26歳、女性）

「その日のニュースの総括として、久米キャスター以来、視聴している。NHKのニュースと交互にみることが多い。」（年齢無回答、男性）

「家事がひと段落し、ゆっくりとニュースが見れる。」（40歳、女性）

「当日のニュースを把握するのにあたり、ちょうど良い時間帯のため。」（47歳、男性）

「以前の久米さんの時から見ており、解説者なども多く出演、アナウンサーもNHKのように、ただ

【図表 2-9】 局名・番組名	件数
(UHB)めざましテレビ	15
(STV)ズームイン SUPER	14
(HTB)たけしのTVタックル	12
(HTB)報道ステーション	12
(NHK)ニュース7	12
(HBC)渡る世間は鬼ばかり	9
(NHK)わかば	9
(HBC)サンデーモーニング	8
(STV)どっちの料理ショー	8
(HBC)世界・ふしぎ発見！	7
(HBC)筑紫哲也 NEWS23	6
(HBC)はなまるマーケット	6
(HTB)サンデープロジェクト	6
(STV)どさんこワイド212	6
(HBC)ブロードキャスター	5
(NHK)おはよう日本	5
(STV)ウェークアップ！	5
(STV)行列のできる法律相談所	5
(UHB)とくダネ！	5

ニュースを読むだけでなく、奥深くわかりやすく解説してくれる。ニュース、報道、天気、スポーツ、その他が一つの番組で見られるのも魅力である。」(47歳、男性)

「自営業に従事しているものですから、一日の内でゆっくりテレビと向き合える時間帯です。各分野の情報を知る上で、欠くことの出来ない番組となっています。」(57歳、女性)

「朝は、忙しく時間がとれず、ゆっくりとニュース見れないのですが、夜の寝る前のニュースは時間(番組の)も長く、一日の出来事がよく分かる為ほぼ毎日見えています。」(58歳、男性)

久米宏氏がキャスターをつとめていた「ニュース・ステーション」以来の視聴者がいることは容易に予想できましたが、この番組の強みは、回答者の皆さんの生活リズムからみて、早すぎもせず、遅すぎもしない「ちょうどよい」放送時間帯にもあるようです。

「報道ステーション」と同じ件数であった「ニュース7」については、「報道ステーション」と共通しますが、「1日のニュースを知りたいから。」(68歳、女性)、「1日のニュース確認のため。社会生活を営む上で必要な情報として。」(73歳、男性)のように、生活の基本情報としてニュースにふれる意識がみられました。また、「夕食後の落ち着いた時刻で、その日のおもな出来事を知るのを楽しみにしています。」(78歳、女性)、「情報が早くコマーシャルがない。アナウンサーが落ち着いていてニュースを聞きやすい。」(43歳、女性)、「何十年も前からニュースはNHKを見ております。アナウンサーの話し方など、聞きやすいです。」(71歳、男性)のように、夕食後の時間帯にあたる、長期間の習慣的な視聴の反映、落ち着いた雰囲気への好みなどの理由により視聴している例もみられました。さらに、この番組の特徴としては、この番組をあげている回答者の大多数が、50代から70代の高齢層だった点です。

「よくみる番組」の選択にあたって、番組のジャンルの選択傾向については、回答者の皆さんの生活リズムと密接に関連していることがわかりました。しかし、同一時間帯、同一ジャンルのなかでどの番組を選ぶかについては、皆さんの好みが反映されているようです。

②「たまたまみた番組」の選択傾向

回答者の皆さんがアンケートをお配りした際に、なんらかの理由で偶発的に視聴した番組として、比較的多く(5件以上)あげられていたものをまとめたのが【図表 2-10】です(有効回答の総数は272件)。「いつもみる番組」に比べて、回答総数も、多くの回答者から名前をあげられている番組の数も少なめでした。【図表 2-10】の内訳をみると、ニュース番組、情報番組が多くあがっていることがわかります。

これには一つ理由が考えられます。4日間の調査対象日のうち10月23日(土)に新潟県中越地震があり、その報道をみるために皆さんがニュース番組を視聴したためです。例えば、NHKの「ニュース7」をみた回答者の方は、「新潟中越地震が気になったため」(35歳、女性)この番組を視聴したと答えています。また、同じNHKの「ニュース10」をみた方々には、「新潟地震で優太ちゃんの救出状況が気になったため」(58歳、女性)といった記述や、刻々と伝

【図表 2-10】 局名・番組名	件数
(HTB)いきなり黄金伝説。	7
(HTB)大改造劇的ビフォーアフター	7
(NHK)クローズアップ現代	7
(HTB)新・京都迷宮案内	6
(HTB)報道ステーション	6
(NHK)ニュース7	6
(NHK)ニュース10	6
(HBC)新札発行記念ドラマ・樋口一葉物語	5
(STV)どさんこワイド212	5
(UHB)ヘイ!ヘイ!ヘイ!	5

えられる被害の状況から目を離したくなかったためか、普段は「他局でニュースは見ているが今回はNHKでコマーシャルなしでみたかったため」（54歳、女性）という記述もみられました。

しかし、新潟県中越地震のような大きな災害があったにもかかわらず、「たまたまみた番組」におけるニュースの件数がこの程度であることを考慮しますと、この地震によって誘発されたテレビ視聴は、地震発生が午後6時頃とニュース番組の放送時間帯ともかさなっていることもあって、習慣的に視聴しているニュース番組に吸収されたようです。

3. 記憶の中にとどまるテレビ視聴の個人史

今回の調査では、回答者の皆さんが、テレビでみた①娯楽・教養番組（ドラマ、歌番組、バラエティ、ドキュメンタリーなど）、②事件・事故、③スポーツの試合について、それぞれご自身のテレビ視聴をふりかえってもらったことで、記憶に残った番組や出来事、試合などを自由にあげていただきました。

①娯楽・教養番組

娯楽・教養番組では、ドラマ「北の国から」をあげた回答がもっとも多いという結果でした（【図表3-1】）。全国的に話題を呼んだドラマですが、ビデオリサーチ社のデータでみると札幌地区での視聴率は高いことがわかります。1981年から82年にかけて放送された第1回目の放送終了の時期には、札幌地区では視聴率が最高28.7%であったのに対し、関東地区では21.0%でした（ビデオリサーチ調べ、以下視聴率については同様）。1992年の放送では札幌地区で37.5%、さらに、1998年には2日間にわたって前後編が放送され33.3%（後編）、2002年の放送では44.6%（前編）となっており、いずれも関東地区より高い視聴率をあげています。ドラマのストーリーももちろんですが、やはり北海道が舞台となり、しかも全国的にも人気ドラマとなったことで、道民の郷土愛をくすぐる側面もあったのではないのでしょうか。

同じドラマとしては、「おしん」や「冬のソナタ」といった番組もあがっています。「おしん」は、アジア諸国でも放送されるなど、国際的な視聴者を集める日本の代表的ドラマとなっています。放送当時の1983年には、関東地区・札幌地区とも最高62.9%の高視聴率を獲得しています。回答者の中にも、「おしん」放送当時の印象が強く残っているようです。「冬のソナタ」（2003年BS放送、2004年地上波放送）は、いわゆる韓流を代表するドラマで、しかも最近のドラマなだけに、回答者の中に鮮明な印象が残っているのではないのでしょうか。

お笑い・バラエティ番組では、「8時だヨ！全員集合」がもっとも多くあがりました。放送当時、大変な人気番組であったことはいうまでもありませんが、その後も現在に至るまで、多くの人気お笑い番組があったにもかかわらず、すでに古典の域に達したこの番組があ

【図表 3-1】番組名	放送期間	件数
北の国から	1981-2002	39
8時だヨ！全員集合	1969-1985	28
オレたちひょうきん族	1981-1989	20
ザ・ベストテン	1978-1989	19
プロジェクトX	2000-	15
NHK紅白歌合戦	1953-(1951)(*1)	12
おしん	1983-1984	12
夜のヒットスタジオ	1968-1990	13
冬のソナタ	2003,2004	10
紅白歌のベストテン	1969-1981	6
水曜どうでしょう	1996-(*2)	6
3年B組金八先生	1979-	5
白い巨塔	2003-2004(*3)	5
大地の子	1995	5
*1 1951年にラジオで第1回放送、テレビは1953年から		
*2 2002年に休止、その後、新作を断続的に制作中		
*3 過去に何度かドラマ化されている。ここでは、最近制作されたドラマの放送期間を示す		

がるのはなぜでしょうか。インタビュー調査で話をうかがったある回答者の方は、「家族みんなでみて、楽しかった」と答えています。このような視聴体験の共有が、番組の印象を深く刻ませたのではないのでしょうか。次に件数が多かったのが、「オレたちひょうきん族」です。「8時だよ！全員集合」と世代交代するようなかたちで人気番組として成長した番組で、ここで人気を獲得した多くの芸人たちが現在も活躍しています。「水曜どうでしょう」は、北海道発の深夜バラエティ番組で、ロコミやネットを介してじわじわ人気が広がり、雑誌や新聞などでも取り上げられ、全国区の知名度を獲得しました。そのことから、この番組の習慣的視聴者でなくとも、この番組の話題にふれた回答者は多かったはずですが、ちなみにこの番組をあげている回答者は、20代から60代と年齢層も広がっていました。

ドラマ、お笑い・バラエティとともにあがっていたのが、「ザ・ベストテン」や「紅白歌合戦」、「夜のヒットスタジオ」、「紅白歌のベストテン」といった歌番組です。回答の中には、具体的な番組名をあげずに「歌番組」と答えたものも15件あり、過去に視聴した歌番組がかなり印象に残っていることがうかがえます。歌は、その時代の雰囲気とともに記憶されやすいものですが、それだけに時代の共有体験が歌番組の記憶と結びついているのかもしれない。また、大晦日に家族みんなで歌番組をみるというように、歌番組は、家族との共同視聴経験とも結びついているのではないのでしょうか。

教養的な番組としては、「プロジェクトX」があがっています。この番組をあげている回答者は、年齢では40代と50代が多く、熱心にこの番組を視聴している年代がうかがえる結果となりましたが、男性と女性の回答者のあいだに大きな違いはありませんでした。

②事件・事故

【図表3-2】にまとめた事件・事故では、1972年の「浅間山荘事件」がもっとも多くあがりました。この事件をあげている回答者は、40代以上に集中していました。30年以上も前の事件ですが、山荘に立てこもった連合赤軍メンバーと警察との攻防がテレビ中継され、当時の視聴者はリアルタイムで事件の推移を見守りました。ある回答者の方は、「家は自営で仕事をしていましたが、一日中テレビはつけていて、この事件は目にしていました」（43歳、女性）と書いています。この時の記憶が、中継をみていた皆さんの中に依然鮮明なものとして残されていることがわかります。

2001年の米同時多発テロは、おそらくは21世紀最初の世界史的イベントではないかと思われませんが、この事件でもハイジャックされた航空機がニューヨークのワールドトレードセンターに衝突する映像が繰り返し放送され、テレビの映像が視聴者に大きなインパクトを残しました。近年の出来事であるこの衝撃的な事件が記憶に残っているのは当然といえるでしょう。

日本は地震国であり、それだけに大きな地震の被害が数年に一度襲ってきます。【図表3-2】には、1995年の阪神淡路大震災、2004年の新潟中越地震、1993年の北海道南西沖地震があがっています。この他にも、特定の地震名をあげずに地震被害をあげている回答も多くありました。ちょうどこの調査

【図表3-2】出来事	時期	件数
浅間山荘事件	1972	86
米同時多発テロ	2001	73
阪神淡路大震災	1995	46
新潟中越地震	2004	38
オウム関連事件(サリン事件など)	1994-1995(*1)	35
日航機墜落事故	1985	12
アポロ11号月面着陸	1969	9
北海道南西沖地震	1993	9
ケネディ大統領暗殺事件	1963	8
*1 松本サリン事件(1994)から地下鉄サリン事件、教団代表の逮捕(1995)までを示す。		

をおこなった時期に新潟中越地震があったこともあり、地震の恐ろしさを回答者の皆さんもあらためて

実感していたのではないのでしょうか。

その他には、古くはケネディ大統領暗殺事件やアポロ11号月面着陸から、日航機墜落事故、オウム真理教関連の事件といった事件・出来事があがっています。これらはいずれも当時テレビをとおして大きく報じられた事件・出来事であり、リアルタイムで見た世代、その後の番組などで当時の映像を見た世代も含めて、その印象が皆さんの記憶にとどまっているようです。

③スポーツの試合

スポーツの試合については、野球がもっとも多くあがっていました（【図表3-3】）。これには、プロ野球と高校野球とがありますが、調査をおこなった2004年の特殊事情でいえば、夏の甲子園大会における南北海道代表の駒大苫小牧高校の優勝という大きな出来事があったことが影響していると思われる。この出来事を明確にあげているものだけで40件ほどありました。駒大苫小牧高校が優勝を決めた日は、道内各地で市民がテレビの前に集まり、声援を送る様子がテレビでも放送されました。プロ野球については、シーズン中の個別の試合についてあげている回答は希で、特定のチームの優勝や印象に残った日本シリーズがあげられていました。また、大リーグでのイチロー選手や松井秀喜選手のような日本人選手の活躍をあげている回答者もおられました。2004年は、イチロー選手が、大リーグのシーズン最多安打記録を塗りかえたこともあり、彼らの活躍が皆さんの印象に残ったようです。また、あとでふれるオリンピックにおける日本代表野球チームの試合を思い浮かべていた回答者もいたのではないのでしょうか。

次に、サッカーの試合についてあげた回答が多くみられました。日韓でのワールドカップ開催では、札幌も試合会場になり札幌市民の関心呼びましたが、回答の中では、特定の大会をあげるよりも単に「ワールドカップ」と回答する例が大半でした。日韓大会以外にも、日本が初出場したフランス大会などもあり、一大会に絞れなかったのでしょうか。サッカーについては、いわゆる「ドーハの悲劇」をあげている回答もありました。他の競技も含めて特定の一試合をあげる回答が少ないだけに際立っています。それだけ、日本代表のワールドカップ出場の夢が消え去ったあの試合が、皆さんの脳裏に深く刻み込まれていたようです。その後、「ドーハの悲劇」は、ワールドカップ出場に向けて再起をかけた日本代表チームの原点となり、結果、1998年のフランス大会出場へと結実するという国民的ストーリーの原点ともなった点で、やはり特別な試合だったといえます。

オリンピックについてあげている回答も多くみられました。すでにふれた野球やサッカーも含む多数の開催種目を擁するスポーツの世界大会だけに、全体としてはもっとも回答件数の多い項目といえます（「オリンピック」というワードをあげている回答だけを単純に集計すれば、160件に及びます）。

具体的には、2004年のアテネオリンピック、2000年のシドニーオリンピック、さらには地元札幌でおこなわれた1972年の札幌オリンピック、長野でおこなわれた1998年の長野オリンピック

【図表3-3】競技・試合・出来事	件数
野球	81
サッカー	55
ワールドカップ	41
駒大苫小牧夏の甲子園優勝	39
アテネオリンピック	28
札幌オリンピック	25
バレーボール	21
スキー・ジャンプ競技	17
長野オリンピック	14
日本シリーズ	10
マラソン	10
K1	7
長島茂雄引退試合	7
ドーハの悲劇	6
シドニーオリンピック	6
プロレス	6
大相撲	5

が回答にあげられている主だった大会です。札幌大会について、ある回答者の方は、次のように記しています。「今回のオリンピック [アテネ] もすごかったけど、札幌でやった冬季オリンピック!! 私の兄は中学生だったけれど、聖火を持って走りました。もし今でもあるなら見てみたい、ジャンプのシーンも子供ながらおぼえています。」(41歳、女性) その他に、特定の大会名や競技を記さない「オリンピック」という回答も多くありました。競技では、ウィンタースポーツの盛んな札幌らしく、スキーのジャンプ競技やスピード・スケート、フィギア・スケートにおける日本選手の活躍があげられていました。夏季種目では、マラソンや柔道、水泳、バレーボール、野球といった種目があがっています。

その他には、バレーボールに関する回答が目立ちました。個別の回答をみると、いわゆる「東洋の魔女」の活躍(東京オリンピック)の時代から最近のオリンピック大会やワールドカップ大会、春の高校バレー大会があがっています。興味深いのは、ここで「バレーボール」をあげている回答者全員が女性だったことである(性別無回答の1名を除く)。ある回答者は、「ワールドカップ女子バレーTVの前で叫んだ!! 涙した!! 一瞬も見のがさない様に電話も出ず、子供も別の部屋に行かせ集中した。」(38歳、女性)と記しています。また、「小学生頃に見るバレー(女子)の試合がとても楽しみだった。」(43歳、女性)記している回答者もおられました。

K1やプロレス、大相撲、プライドといった格闘技系の種目もあがっています。ただし、プロレスや大相撲については、力道山やアントニオ猪木、ジャンボ鶴田の時代や千代の富士、若貴時代を懐古する回答が中心でした。

スポーツ・イベントの一つとして、有名選手の引退試合・会見があります。今回の回答の中にも引退試合・会見をあげたものがありましたが、やはりその中でもっとも多かったのが、元ジャイアンツの長嶋茂雄選手の引退試合でした。その他には、同じジャイアンツの王貞治選手、原辰則選手、大相撲の横綱千代の富士があがっていました。ある回答者の方は、「長嶋さんの引退会見を見てからなぜかプロ野球ファンになりました。千代の富士の引退会見など見ても涙が出そうになります。」(54歳、女性)と記しています。

以上まとめてきたのは、テレビ視聴をとおして回答者の皆さんの中に形成された記憶についてです。実際には、当時重大な出来事であったにもかかわらず、ここにあげていない出来事もあります。例えば、かつて北海道民にとって大きな脅威であったソ連軍による大韓航空機撃墜事件ですが、今回の回答には1件もみられませんでした。当時は、テレビニュースでも大きく取り上げられていたはずですが、回答者の皆さんの記憶の中では、すでに遠い過去の出来事になったようです。その一方で、「北の国から」への関心や北海道を襲った地震・津波の被害、ウィンタースポーツへの関心など、北海道らしい回答も随所にみられる回答結果でした。

回答をいただいた皆様方、まことにありがとうございました。